巻頭言

下向井　龍彦

卒寿を二年前に迎えられた坂本先生の教え子・孫弟子、定年退職する私にとっては後輩・教え子たちが、こんな立派な記念誌を坂本先生と私にプレゼントしてくれました。執筆した人一一人、論説など一四編、総頁二〇七頁に達する分厚くずっしりと手応えのある冊子です。中身もです。プレゼントされる側の坂本先生と私も、常連として執筆陣に加わっています。本号にも先生が最初に原稿を寄せてくださいました。先生のご長寿といつまでもお変わりないご健筆ぶりを、教え子・孫弟子一同、心よりお祝い申し上げます。先生の「日本史時代区分の史的研究」はそろそろ集大成の段階にさしかかっていますが、次号も巻頭論文を飾っていただきますので、まだ課題を残しておいてくださるようお願いします。最後に原稿を出したのが私というのも、前号と同じです。タイムリミットぎりぎりまで悪戦苦闘した末に、ようやく完成させたのが、二月三日、その翌日に全原稿耳を揃えて入稿しました。編集作業と並行しながらの執筆だったので、原稿のチェック、体裁の統一などは、今回も、渡邊誠氏・齋藤拓海氏・山本佳奈氏の三人の手を煩わせてしまいました。三人の助力がなかったら、本誌をタイムリミットまでに刊行することはできなかったでしょう。多忙のゆえに原稿が間に合わなかった方々。次号には是非、寄稿してください。私の古稀までにはあと二、三号は出したいものです。

三月末日をもって下向井研究室は消滅します。二〇有余年前、東千田町の文学部国史研究室の移転のときの、スチールのフレームだけになった殺風景な書架の列が瞼に浮かびます。この部屋もあのときの国史研究室（のミニサイズ）みたいになるのか。あの頃のことがよみがえる。坂本先生も有元先生もすでに退官されていた。一〇年目の助手だった私は、その年まるまる一年間、国史研究室移転「専当」として、書架に並ぶ万巻の図書をひたすら段ボールに詰め、輸送票を書いては貼り、すでに移転を終えていた教育学部の一室を宛がわれた集積場所に、台車に段ボール箱を満載して運び、ピラミッドのように積み上げる作業を毎日毎日延々と続けた。補佐員・学振特別研究員・ＯＤ・研究生・院生・学生たちが助けてくれた（個人名を挙げかけたが、不公平になってはいけないので差し控える）。彼らの多くは過酷な労働の成果をほとんど享受することなく修了し卒業し大学を去った。移転作業を終えた三月三一日をもって私も国史研究室を去り、南区東雲の学校教育学部に移った。よく拾って下さったと、心から感謝している。

それから二四年、小学校教師・中高社会科教師を目指す学校教育学部・教育学部の学生が、私の授業によって古代史の魅力に目ざめ、ゼミ生となって卒論・修論を書いて巣立っていった。博士課程後期まで進学して学位をとったゼミ生もいる。文学部で古代史を学ぶ意欲ある院生・学生も私のもとに集まった。みんな私の宝である。（二〇七頁名簿）。ＳＨＩＭＯＫＥＮ塾読書会が広島古代史研究の新たなメッカになった。着任三年目で発刊した『史人』は二号でいったん休刊に追い込まれたが、やがて復刊し、倉橋島（のち能美島）サマーセミナーとともに、広島古代史の新たな集いの場となり、七号まで漕ぎ着けた。これからも『史人』は広島古代史の結集の場であり続けてほしい。

私は、坂本先生から託された王朝国家論を発展させ、次世代に引き継ぐことを使命と心得て、助手時代を含めれば三四年間、教育・研究に取り組んだ。研究成果は乏しく貧しいものであり、研究書を出さなかったことは悔やんでも悔やみきれない。しかし『武士の成長と院政』（講談社日本の歴史07 二〇〇一年）で、坂本先生から継承した王朝国家論と独自に構築した軍制論を両輪に独自の奈良平安時代史像を描くことができたこと、それが今の広島古代史学・王朝国家論の一つの指針となっていることを、ささやかな誇りとしたい。私が律令軍制論で提起した八世紀末帝国性解消・規制緩和論が、私が考えもしなかった踏歌節会・雅楽寮＝儀礼論、地震対策、隼人支配などの具体的課題で深められつつあることも嬉しい。王朝国家の前提である九世紀律令国家論が、いま、広島では旬である。あとのことは若い俊英たちに託したい。

二〇一八年二月七日